

草津市立矢倉小学校通信 令和元年7月1日 NO.6



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

困った子

自宅から少し離れたところの大型店を訪れたときのこと。向こうから、やけに明るくのんきに歌を歌いながら、裸足で闊歩する幼稚園くらいの女の子がやってきた。保護者らしい大人は近くにいない。その子は、歌の世界の主人公になりきり、陽気に振り付けしながら通り過ぎていった。なんとまあ実に幸せなことだと、見ているこちらも楽しくなった。が、しばらくして、「ママー！」「ママァー!!」と叫びながら、歩いてきた道筋をその子は戻ってきた。こんなに大きな声が出せたなら、たとえ不審者が声をかけても、「もう、やめてよ!!」とこれまで以上に強く叫び、周囲に助けを求めることができるだろう。ママしか寄りつけないほど、周囲の大人が注目できる「ママ」を探す見事な絶叫だった。やがて、その声もびたりとやみ、「困った子ねえ。」の母親らしき声が出た。ひょっとして、あの子はいつもの調子で明るく楽しくふるまっただけではないか。母親は大声で叫ぶわが子のところへ姿を現し、周囲から「なんてひどいことをする親なのだ。」など見られないよう、つかず離れず、物陰から様子をうかがっていたのだろうか。

「困った子」と言えば、こんな思い出もある。梅雨明けの陽ざしがとてもきつい日、甥っ子のしんちゃんが3歳くらいのときの出来事である。しんちゃんは3歳になって、ずいぶん体力もついたことだからと、私たち夫婦は軽い気持ちで、それこそ子守りがてら、彼を連れだし、お墓参りをすることにした。暑い中、彼は黙々と歩いてくれたが、案の定、「歩けないからだっこして。」とせがんできた。思っていた以上に気温が高く、何かあっては大変だと、私は彼をだっこした。私が「ああ、暑いなあ。」と言うと「うん、暑い。」と彼はつぶやき、「のど渴いたなあ。」と言うと「うん、のど渴いた。」と首にかけていた水筒に口をつけ、ごくごく飲み干し、彼一人がのどの渴きを潤した。そこで「おじさん、のど渴いた。」と窮状を告げたのだが、これにはただ黙っているだけで、何の返しもししてくれない。「困った子だなあ。どうしてこちらの気持ちがわからないのか……。」私は悔しく、腹立たしく思えてきたのである。

そうこうするうち、ますます汗は滝のように流れ出てきたものだから、私はハンドタオルを取り出し、顔や首筋の汗を拭き取った。と、彼は訴えた。「ぼくだって暑いんですよ。」このやりとりを聞きながら、私の横を歩む妻は大笑いし、「二人ともごくろうさん。あそこのコンビニで一休みしようか。」と救ってくれた。

先の、ママを探すことになった陽気な女の子も、ぼくだって暑いと訴えた甥っ子のしんちゃんも、大人にとっては、結果的に扱いに困ってしまった「困った子」だ。しかし、少し冷静になれば、本当はどうだろうと思えてくる。そもそも、困っていたなら親から離れないはずだし、暑い中を連れ出し困らせたのは誰なのか。

子どもは、いつも精一杯、今を生きようとするものだ。まわりの大人が、「困るか／困らないか」だけの自分勝手なものさしから外れた途端、「困った子」扱いにしてしまわないようにしたい。

校長 大林 道範